

集合住宅の住戸平面計画に関する研究 (II)

—対面型キッチン志向の入居者特性—

新田 米子・渥美 正子¹⁾・佐藤 芳美²⁾

Planning the Dwelling Units of Apartment Houses (Part II)

—A Study on the Characteristics of Residents Prefer Semiopen Kitchen—

Yoneko Nitta · Masako Atsumi · Yoshimi Sato

Summary

The purpose of this study is to clarify the characteristics of residents who prefer semiopen kitchen. We conducted a survey among residents at condominium units in November 1992. It can be found that the positive dietary life groups (Type I and Type II) prefer semiopen kitchen. Type I has positiveness to dietary life and receiving guests. Type II has positiveness to cooking for thier families. And these two groups spend more time for thier cooking and supper than the other groups.

Received Oct. 30, 1993

Keywords : Dwelling units, Composition of L. D. K. areas, Semiopen kitchen, Dietary life style, Lite stage

1 研究目的

本研究は、家族のライフステージおよびライフスタイルと集合住宅住戸平面との関連性を追究しようとする調査研究の第2報である。¹⁾

集合住宅住戸平面の最近の特徴としては、DK型からLDK型(LD型と狭義のLDK型から成る)への移行があげられる。²⁾さらに最近では、対面式キッチンを取り入れたLD型の増加が目立つことも特徴といえる。DK型は、公営住宅の住戸平面において、その採用が未だ少なくないが、わが国の集合住宅の全体の流れとしては今後DK型がさらに減少し、対面型LD(以後「対面型」と記す)を中心とした多様な住戸タイプの供給が予測される。

そこで本報では、昨今若い世代を中心に好評を得つつあるこの「対面型」L. D. K構成に着目し、このタイプを志向する居住者の特性をライフステージ、食生活スタイルから検討を加え、住戸平面におけるL. D. K構成の今後のあり方を追究しようと試みるものである。

¹⁾本学非常勤講師 ²⁾愛知淑徳短期大学

表1 調査票回収状況

	K団地	U団地	計
配票数	181	112	293
回収数	122	76	198
有効回収率	67.0%	67.9%	67.6%

2 研究方法

同一住宅団地内で多様な住戸プランをもつ集合住宅として、名古屋市および同市近郊に立地する民間分譲集合住宅2か所を選定して、入居者（成人女性）を対象にアンケート留置自記法（一部郵送回収）による調査を実施した。調査期間は、1992年11月21日から同月29日にかけてである。調査票の回収状況は表1に示すとおりである。

3 調査対象の概要

(1) 対象団地の概要

対象団地の概要は、表2に示す。K団地は、愛知県海部郡蟹江町に位置し、U団地は、名古屋市天白区天白町に位置する、両者同一の民間供給主体によって建設されたものである。住戸規模は、両団地ともほぼ同程度で、3LDK、4DK、4LDKが中心の住戸で形成されている。キッチンタイプからみたL、D、K構成の配分は、両団地合わせて、対面型139戸、LDK型139戸、K独立型108戸、DK型89戸となっている。それぞれの住戸プランの代表的なものを図1に示す。

(2) 対象世帯の属性

対象世帯の属性をまとめると表3のようになる。

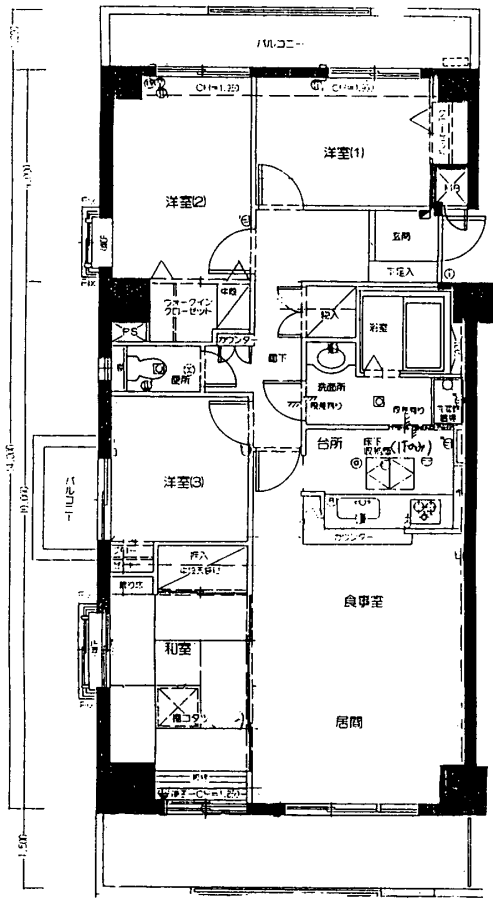
世帯人員は「4人」が54%で最も多く、平均人員は3.54人である。

表2 対象団地概要

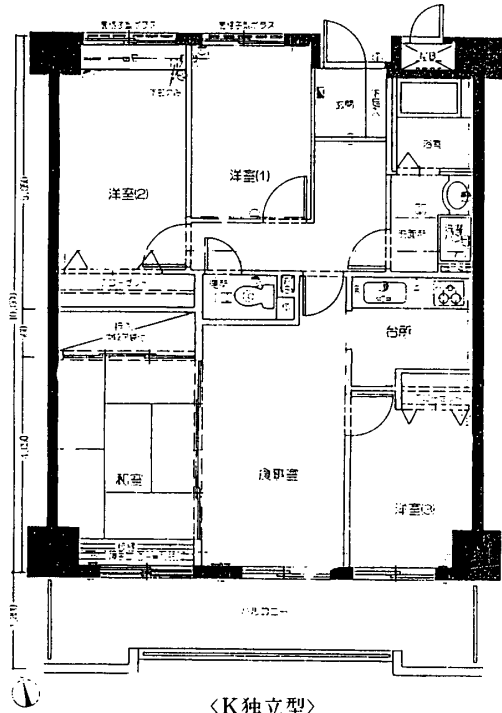
	K団地	U団地
所在地	愛知県海部郡蟹江町	名古屋市天白区天白町
供給形式	民間分譲	民間分譲
入居開始	1990年	1989年
総住戸数	297戸	178戸
住戸面積	63~124	64~121㎡
住戸平面タイプ	3LDK(139戸)4DK(9)4LDK(143)5LDK(6)	3LDK(48)4DK(73)4LDK(57)
キッチンタイプ	K/DL(108戸) K独立対面(101) LDK(79) DK(9)	K独立対面(38) LDK(60) DK(80)

表3 対象世帯の属性

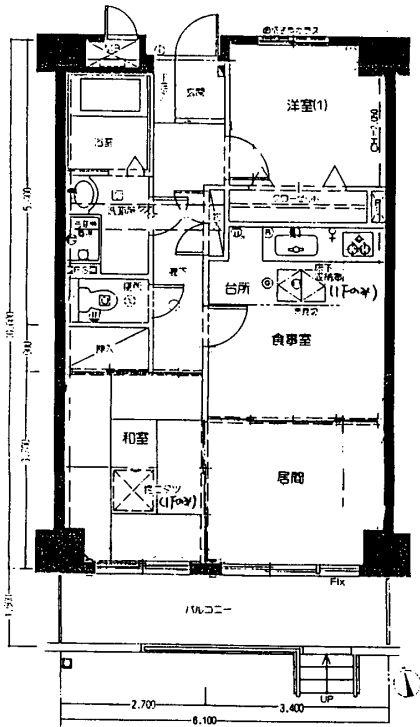
家族人数	1人	4(2.0%)	
	2人	30(15.2)	
	3人	36(18.2)	
	4人	107(54.0)	
	5人以上	18(9.1)	
	不明	3(1.5)	
	AV. 3.54人		
ライフステージ	長子幼児以下	52(26.3)	
	長子小学生	54(27.3)	
	長子中学生以上	52(26.3)	
	夫婦のみ(妻30歳代以下)	23(11.6)	
	夫婦のみ(妻40歳代以上)	4(2.0)	
	その他	9(4.5)	
	夫・妻の年齢		夫
20歳代		13(6.8)	36(18.3)
30歳代		106(55.5)	102(51.8)
40歳代		48(25.1)	38(19.3)
50歳代		15(7.9)	16(8.1)
60歳代以上		5(2.6)	1(0.5)
不明		4(2.1)	4(2.0)
AV. 39.3歳		AV. 36.9歳	
夫の職業	事務、販売、サービス職	91(47.6)	
	専門・技術職	59(30.9)	
	個人業主	12(6.3)	
	その他	18(9.4)	
	不明	11(5.8)	
	妻の就労形態	フルタイム	41(20.8)
パートタイム		46(23.4)	
無職		103(52.3)	
不明		7(3.6)	



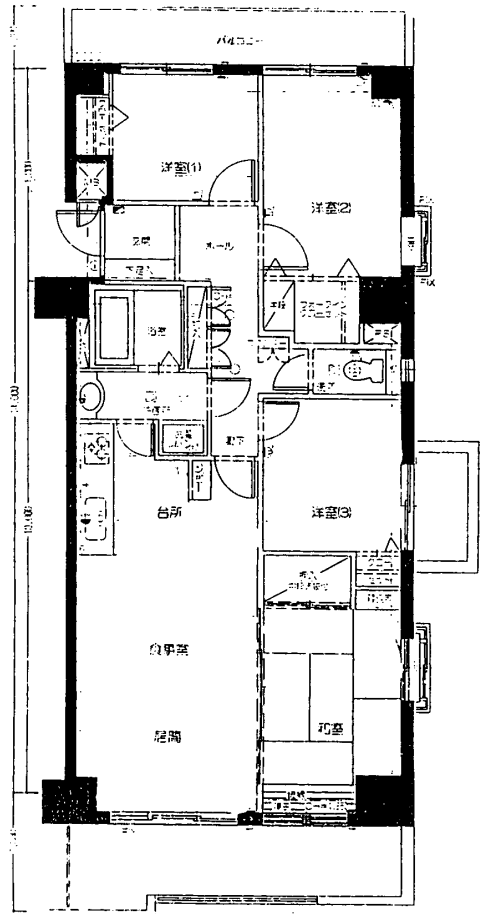
<K独立対面型>



<K独立型>



<DK型>



<LDK型>

図1 対象住宅住戸平面例

夫、妻の年齢は30歳代が中心で、それぞれの平均年齢は39.3歳、36.9歳となる。夫の職業は「事務・販売・サービス業職」が半数弱を占め、ついで「専門・技術職」30.9%の順となる。妻は、幼児・低学年児を抱える世帯が多いためか、「無職」が過半数を占め、「フルタイム」20.8%、「パート」23.4%となっている。

4 結果及び考察

(1) 居住者属性と住戸タイプ

居住者のライフステージ別に住戸タイプ（L、D、K構成）の分布をみると、ライフステージ間の差異は小さく、「対面型」は広範なライフステージ層に住まわれていることがわかる（表4）。しかし現在の家族構成で住宅を選び直したら、どのタイプを選択するかという問に対しては、ライフステージによって差が生じる（図2）。「対面型」を志向する割合は、どのライフステージにおいても高率を占めるが、「長子幼児」「長子小学生」においてその傾向が強まる。

また現状のL、D、K構成別に、その志向を比較すると「対面型」居住者が再度「対面型」を選ぶ割合は52.7%となり、対面式でない「K独立型」や「K/D/L型」を志向する者は、合わせて34.5%に達する（図3）。このことは、「対面型」居住者が、このタイプの住戸に居住経験のない層に比べ「対面型」の居住性の問題点をより実感しているからではないかと考えられる。

(2) 食生活スタイルとL、D、K構成

L、D、Kをどのように構成するのが望ましいかは、人々の日々の生活行為の中でもとくに「食事をつくる」「食べる」「憩う」または「客を接待する」などの行為がどのように行なわれているのか、また行ないたいのかによって選別されていくものと考えられる。

表4 居住者ライフステージと住戸タイプ (LDK 構成)

	K独立	対面	LDK	DK	不明	計
長子-幼	15 28.8	14 26.9	15 28.8	8 15.4	0 0.0	52
長子小	17 31.5	12 22.2	21 38.9	3 5.6	1 1.9	54
長子中-	11 21.2	16 30.8	20 38.5	5 9.6	0 0.0	52
夫婦のみ -30代	2 8.7	8 34.8	9 39.1	4 17.4	0 0.0	23
夫婦のみ 40代-	1 25.0	1 25.0	2 50.0	0 0.0	0 0.0	4

上段: 人数 下段: %

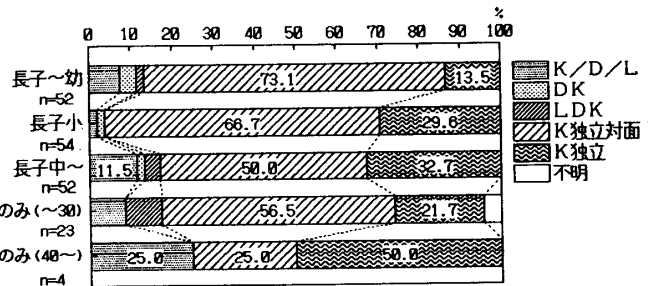


図2 LDK構成志向 <ライフステージ別>

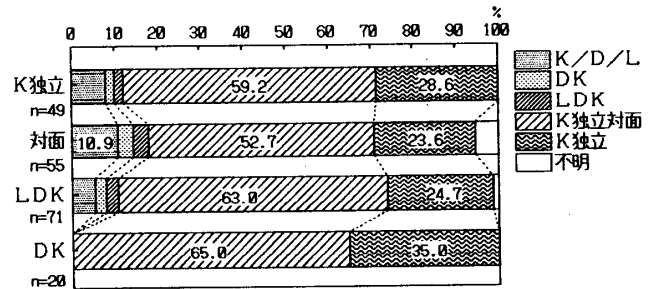


図3 LDK構成志向 <現状LDK別>

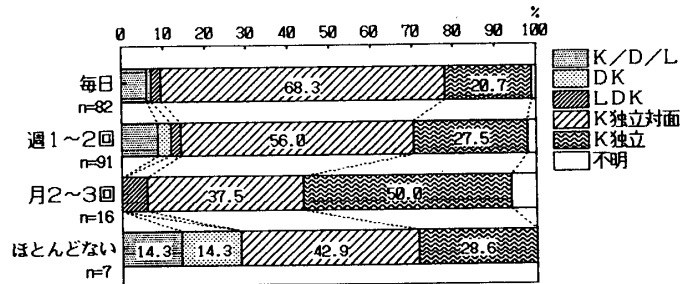


図4 LDK構成志向 <家族揃っての夕食回数別>

そこです、居住者の食事行為に着目し、「家族揃っての夕食回数」,「夕食準備にかかる時間」,「夕食にかかる時間」とL. D. K構成の志向及び現状のLDKタイプとの関連性について述べる。

家族揃っての夕食回数では、ライフステージによる差は認められないが、家族揃っての夕食が「毎日」と答えたグループにおいて「対面型」志向が強まる傾向が認められる(図4)。また「夕食準備にかかる時間」と「夕食にかかる時間」を現状LDK別で比較すると(図5, 6),「対面型」居住者は他タイプ居住者に比べ、準備、食事ともに時間を若干多くかけていることがわかる。

これらのことから、「対面型」住戸の居住者または「対面型」志向の居住者は、相対的にみて家族の食生活を重視する傾向にある居住者層ととらえることができよう。

そこでさらに、居住者の食生活とそれらに関連する生活行為についての意識と実態を構造的に把握するために居住者の“食生活スタイル”の類型化を試みた。このスタイルを把握するための意識項目は、調理への積極性、食への関心、インテリアへの関心、接客観といった観点から30項目を設定し尋ねた。その結果、単純集計値が肯定または否定どちらかに偏りの強いものや項目間で類似性の強いものを除き、20項目(表5)をもとに、多変量解析の中の数量化Ⅲ類を用いて分析を行なった。その結果、図7に示すようにI軸は、「新しい献立を積極的に取り入れる」,「彼岸、節句等季節の祭祀には行事食をつくる」,「時々手製のおやつをつくる」など料理への積極性の意識を表していると思われる。またII軸は「友人・知人を呼んで一諸に食事をするのが好き」,「人を招く時は、気をつかいおっくうである」など社交性への意識を表すと解釈され、居住者の食生活スタイルとして[食生活・社交積極型][食事手作り型][食生活・社交消極型][食事簡便型]の4つのタイプに分類することができた。この食生活スタイルの4タイプの諸特性を表6にまとめ、概略を次に述べる。

[食生活・社交積極型]は、妻の年齢が30歳代と20歳代が8割を占める若い世帯で、妻は無職が67%と比較的多い。夫の職業は「専門・技術職」(32%),「事務・販売職」(24%)が中心である。妻は料理が好きで、新しい献立を取り入れたたり、手作りおやつを作ったりすることに積極的であり、夕食の準備にかかる時間や夕食にかかる時間も相対的に長い。また来客頻度が高く、インテリアへの関心が高いグループである。

[食事手作り型]は、妻の年齢が30歳代、40歳代で占められる(7割)中年世帯である。

妻は無職と有職が半々ずつ占め、夫の職業は「個人業主」(25%)や「専門・技術職」(23%)が主である。このグループは、家庭での手作り料理を重視する伝統志向であり、[食生活・社交積極型]と同様に夕食準備や夕食にかかる時間が長い。人を家に招くことにはあまり積極的でない。

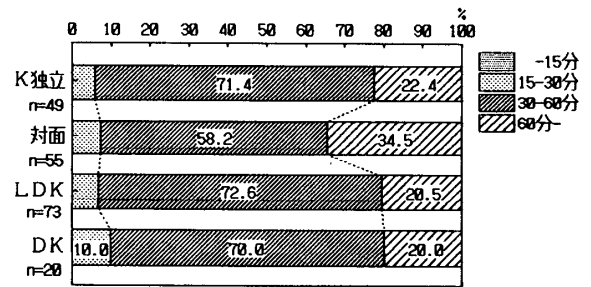


図5 夕食準備時間<現状LDK別>

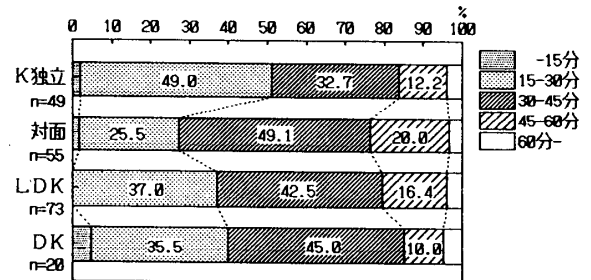


図6 夕食にかかる時間<現状LDK別>

〔食生活・社交消極型〕は、妻の年齢が30歳代、40歳代中心の中年世帯で、有職の妻は半数を占めるが、そのうち「パート」が3割と他のグループより多い。夫の職業は「専門・技術職」(23%)、「事務・販売職」(22%)が主である。食生活全般について関心の低いグループで、来客も少ないのが特徴である。

〔食事簡便型〕は、妻の年齢が30歳代、20歳代が中心の若い世帯で、妻の「フルタイム」が比較多く(27%)、「パート」も23%を占めている。夫の職業は、「個人業主」(58%)が多いのが特徴。このグループは、食事は手早く簡単に済ませたいという意識が強く、外食も多い。したがって、夕食準備にかかる時間は、4タイプの中で最も短時間となっている。そして食生活よりも他の生活により家計を費やしたいと考えている。来客は比較的多い方である。

つぎにこの食生活スタイルとL、D、K構成志向との関連性を探ると、「食生活・社交積極型」と「食事手作り型」が対面型をより多く志向する傾向が認められる(図8)。つまり、食事作りや食事行為を重視する家族は、主婦が台所に滞留する時間が長くなるため、家族とのコミュニケーションを円滑にすること、また家事をしながら幼児・児童の世話をする

表5 食生活行動に関する意識項目

1、新しい献立を積極的に取り入れる	2、1の否定文
3、食事づくりから解放されたい	4、3 〃
5、料理をすることが好き	6、5 〃
7、出来合い惣菜・持ち帰り弁当を利用する	8、7 〃
9、時々手製のお菓子やおやつをつくる	10、9 〃
11、食事は手早く簡単に済ませたい	12、11 〃
13、多少お金がかかっても家族で外食を楽しむ	14、13 〃
15、家族は食事内容について注文をつけることはない	16、15 〃
17、食費は節約し、被服費や教養・娯楽費等にかける	18、17 〃
19、食事の時たいていアルコール類を用意する	20、19 〃
21、ビタミン剤や健康飲料を利用することが多い	22、21 〃
23、食事は座卓に座ってするのが好き	24、23 〃
25、男性が台所に入ることはおおいに歓迎する	26、25 〃
27、彼岸、節句等季節の祭祀には行事食をつくる	28、27 〃
29、食卓や食事室に生け花や鉢植えて飾る	30、29 〃
31、台所を汚す料理はあまりしたくない	32、31 〃
33、食事をする場所にはこだわらない	34、33 〃
35、食事室の照明や壁掛には気をつかう	36、35 〃
37、人を招く時は、気をつかいおつくうである	38、37 〃
39、友人・知人を呼んで一緒に食事をするのが好き	40、39 〃

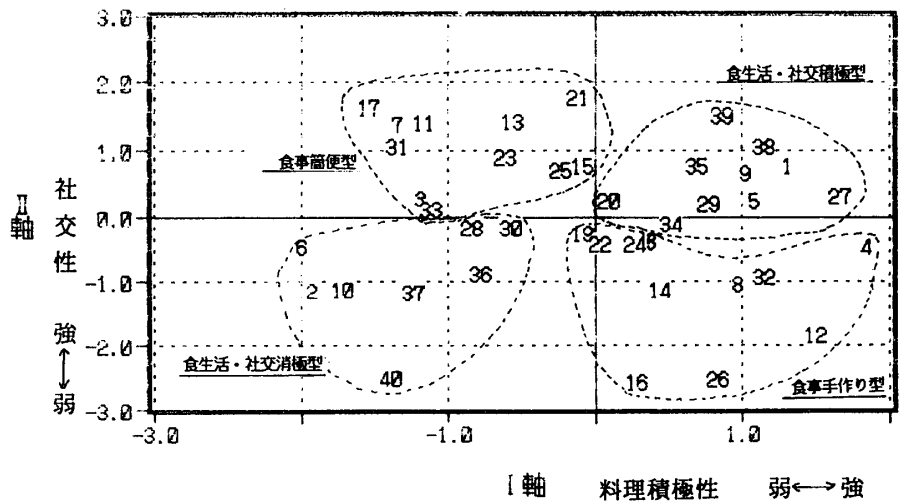


図7 数量化Ⅲ類による食生活カテゴリープロット図 (食生活スタイル)

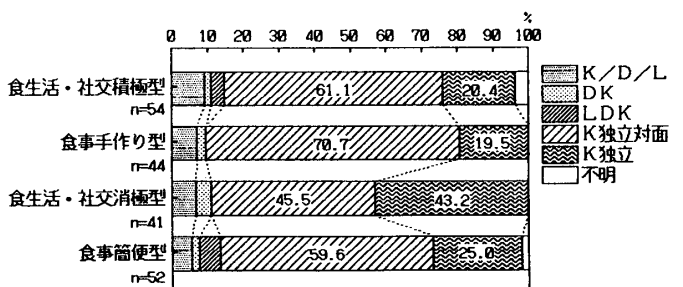


図8 LDK構成志向 (食生活スタイル別)

のに好都合なことが、この「対面型」を選ぶ傾向を高めているのではないかと考えられる。さらに「食生活・社交積極型」はインテリアにも関心の高い層でもあるが、インテリア志向が高いほど、新しい住戸形態を積極的に取り入れようとする意識がはたらかやすいこともその要因の一つと考えられる。またDK型と比較した場合、台所部分が食事コーナーや団らんコーナーから見えにくいという特徴も評価されているといえよう。

表6 食生活スタイル4タイプの諸特性

	タイプI	タイプII	タイプIII	タイプIV
全体に占める割合(%)	28.3	21.5	23.0	27.2
タイプの特徴	食生活・社交積極志向	食事手作り志向	食生活・社交消極志向	食事簡便志向
回答者平均年齢(歳)	34.2	39.5	38.3	35.4
ライフステージ(最多ステージ%)	「長子幼児」31.5	「長子中学生」34.1	「長子中学生」34.1	「長子幼児」32.7
共働き率フルタイム/パートタイム(%)	18.5/13.0	17.5/27.5	20.5/31.8	36.9/23.1
夕食準備時間(「60分以上」%)	37.0	43.9	18.2	3.8
夕食にかける時間(「30分以上」%)	70.4	68.3	54.5	53.9
家族外出頻度(「月2~3回以上」%)	53.7	7.3	27.3	57.7
友人・知人の来客頻度(「よくある」%)	23.6	19.5	6.8	26.9
「食事室のインテリアに気をつかう」(%)	40.7	26.8	4.5	11.5
「台所は来客の目にふれない間取りよい」(%)	51.9	43.9	75.0	65.4

(3) 家事省力化・家事分担と食生活スタイル

前項で触れた食生活スタイルと家事省力化のための設備要求や夫の家事参加との関連について検討を加える。

家事省力化のための台所電化機器として近年増加の著しいものに、電子レンジや自動食器洗い機があげられるが、前者の普及率はかなり高く、対象世帯においても95%の所有率を占め、7割弱が「必要」なものと答えている。これに対し、食器洗い機の方はまだ普及率が低く、対象世帯ではわずか3%の所有にとどまっている。

食器洗い機の必要性について食生活スタイル別に比較すると、[食事簡便型]以外のグループでは半数以上が「不要」と答えていることが注目される(図9)。これは、現在市販されている食器洗い機の性能に対する不満や疑問が要因の一つと考えられるが、また集合住宅の台所のスペースが不足している上に、さらに大型の台所機器でスペースが取られることへの不安もその一因となっていると考えられる。

次に夫の台所仕事への参加程度について述べると、年齢別では30歳代が他の年代に比べ、比較的参

加度が高くなるが(「よくする」+「時々する」の比率が39.1%), 食生活スタイル別では、やはり若い世代が中心の「食事簡便型」で参加度が高くなることが明らかとなった(図10)。今後、男性が台所に入ることが徐々に高まることが予想されるが、このような層には、男女ともに台所作業が可能ないように、台所のスペース、形態、設備の寸法等を考慮し計画していかなければならないといえよう。

(4) L. D. K構成及び台所に対する居住者評価

「対面型」LDKは、前述のように多くの居住者に志向されつつあるが、居住性の問題点の有無を探るため、L. D. Kの総合的評価、台所の使い勝手という2点から検討を加える。

L. D. Kの総合的評価を現状のタイプ別に満足感で表すと、「満足」の比率が最も高いのは「対面型」で58.2%となる(図11)。他の3つのタイプは、類似した傾向を示すが、「不満」の比率の高いのは「LDK型」のオープンタイプとなる。

一方台所そのものの使い心地は、「対面型」「K独立型」において評価が悪く、台所仕事がやりにくいことが「よくある」の比率は、それぞれ21.8%、20.4%を占め、「DK型」ではその比率が10.0%と4タイプの中では最も低い値となる(図12)。台所が使いにくい理由は、「台所が狭い」63.6%「調理台が狭い」67.3%、「窓がない」54.5%「缶類の置場がない」49%、「食器棚が置けない」34.5%となり、前回の調査と同様に台所スペースの不足と開口部不足に対する不満が高率を占めることが問題点として指摘できる。L. D. Kのつながりとしての「対面型」は高く評価されるが、現状のこのタイプの台所は、スペースの拡大化と開口部のとり方が今後の課題といえよう。

5. 要 約

本報では、現在採用が増えつつある「対面型」キッチンを取り上げ、集合住宅入居者の食生活スタイルとの関連で、L. D. K構成志向、L. D. K構成の評価を中心に考察を試みた。調査結果を要約すると次のようになる。

1) 「対面型」LDKは、広範なライフステージ層に志向されるが、とくに「長子幼児」「長子小学生」の層にその傾向が強まる。

2) 入居者の食生活スタイルは、食生活全般に関わる意識項目(20項目)に対する反応をもとに多変量解析の中の数量化Ⅲ類によって分析した結果、[食生活・社交積極型][食事手作り型][食生活・社交消極型][食事簡便型]の4つに分類することができた。

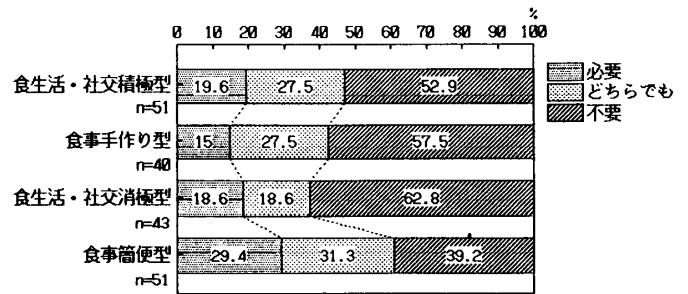


図9 食器洗い機の必要性<食生活スタイル別>

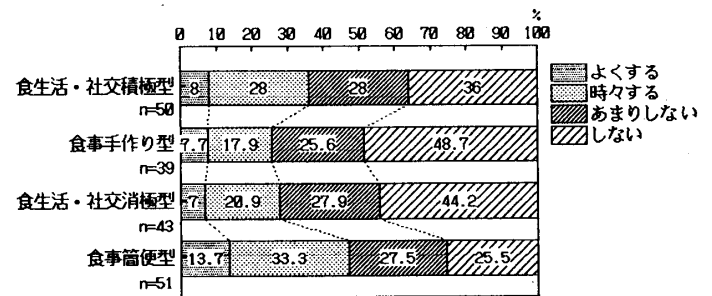


図10 夫の家事参加度<食生活スタイル別>

この食生活スタイルとL、D、K構成との関連に着目すると、[食生活・社交積極型][食事手作り型]で、[対面型]志向が高まることが明らかとなった(前者61.1%、後者70.7%)。この2つのタイプに共通している点は、家族の食事作りに対し積極的であることで、台所に滞留する時間が長いため、家族のコミュニケーションや家族の家事参加のしやすさを考慮してこの「対面型」を志向しているものと考えられる。

3) 家事省力化のための台所電化機器として、今後自動食器洗い機の普及が予想されるが、現段階では全般的にその必要性を感じている居住者は少ない結果となった。しかし食生活スタイル別でみた場合、[食事簡便型]においてそれを「必要」とする比率が他より若干高まる傾向が認められる(29.4%)。また、夫の家事参加もこのタイプにおいて程度が高くなることが認められ、今後このような層には、男女共に台所作業を行なうことを前提に台所のスペース、形態、設備の寸法等を考慮し計画していかなければならないといえる。

4) L、D、Kの構成に対する総合的評価は、「対面型」が「満足」の比率が最も高く58.2%となる。しかし、台所そのものの使い心地は「対面型」「K独立型」において評価が悪く、台所・調理台の狭さや開口部不足が指摘され、これらの改善が今後の課題とされる。

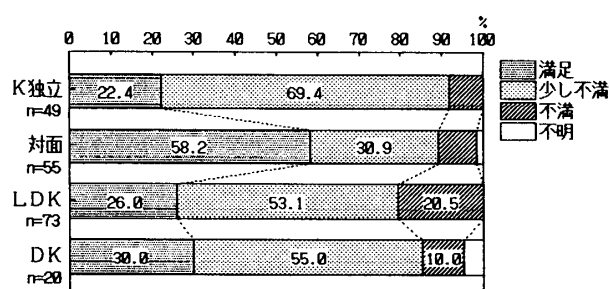


図11 LDK構成の評価 (現状LDK別)

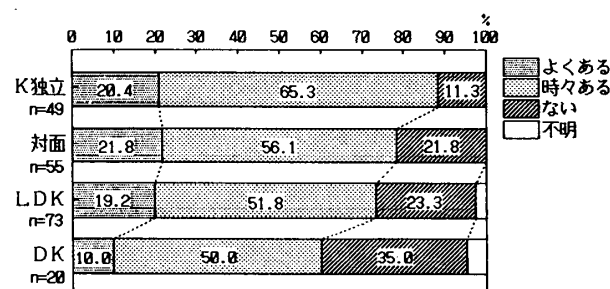


図12 台所の使い勝手 (やりにくさ) (現状LDK別)

注

- 1) 第1報は、新田米子他「集合住宅の住戸平面計画に関する研究—食生活とL、D、Kの構成について—」聖徳学園女子短期大学紀要第19集、1993年、PP. 87~99
- 2) 新田米子「集合住宅における幼児・児童のいる世帯向け住戸計画について—神宮東パークハイツ (住宅・都市整備公団) における事例研究」聖徳学園女子短期大学紀要第18集、1992年、P. 100の図9

参考文献

大澤清二『生活科学のための多変量解析』家政教育社、1992年
 日本建築学会編『建築・都市計画のための調査・分析方法』井上書院、1990年